



鷗 友



平成23年12月20日発行

東京都立白鷗高等学校同窓会 鷗友会

愚かな老いぼれ

鷗友会理事長 本 間 皓 司

インドの古い經典に『頭髮が白くなつたからとて長老ではない。

年をとつただけならば「愚かな老いぼれ」と言う』とあります。私たちは、ぐうたらに惰性で生きていても、或いは目標を持って生き生きと過ごしていても、誰しもが同じように年はとります。同じ年をとるならば、毎日生き生きと充実感を持って、他の人とも楽しく交流をし、喜ばれながら生きていたいと思います。

ところが私などは江戸時代の禅僧、仙崖が歌っているような「聞きたがる、死にとむながる淋しがる、心は曲がる欲深くなる。くだくなる、気短になる愚痴になる、出しゃばりたがる世話焼きたがる。又しても同じ話に子をほめる、達者自慢に人はいやがる」という、嫌な年のとり方をしている「愚かな老いぼれ」ではないかと反省します。人様に嫌われることは承知はしていても、我慢がなくなり、わがままが出るからでしょう。年をとつたら日に三度、花が綺麗だ、空が青い、食事がおいしいと、どんな小さなことでも良いから感動するものを見つけなさいと教えられましたが、実際にはかたくなに、新しいものを受け入れられなくなっています。「日々に新たなり」と朝を迎えられる柔軟なところを持ちたいものです。また若い人であっても、目標や生きている喜びを持たず惰性で生きていけば、心は「愚かな老いぼれ」になってしまうでしょう。

目 次

愚かな老いぼれ……………	1
新たな伝統を築く……………	2
創立120周年の歩みに添えて……………	3
鷗友会創立120周年に寄せて……………	3
同窓会充実が学校発展の鍵に……………	3
歴史と伝統……………	3
鷗友サロン……………	3
鷗友会のお仕事を手伝つて……………	4
移り変わる時代の中で……………	4
拝啓 白鷗高校様……………	4
あつという間に3倍に……………	4
鷗友会百二十周年に寄せて……………	5
同期会生き残りをかけて……………	5
制服画の修復と校庭写真の額装……………	5
白鷗祭に参加……………	6
記念講演会……………	6
120周年記念総会……………	7
120周年記念年表……………	8
古きをたずねて新発見……………	9
支部だより(関西・東葛・川崎)……………	10
会費納入について……………	11
庶務日誌……………	11
物品寄贈……………	11
寄贈図書……………	11
奨学金寄付……………	11
逝去された方々……………	11
編集後記……………	11

鷗友 第155号

平成23年12月20日発行
東京都立白鷗高等学校

鷗 友 会

〒111-0041

東京都台東区元浅草1-6-22

電話・FAX 03-3844-4284

振替東京00180-7-3052会費用

振替東京00100-8-34659一般用

http://www.ouyukai.net/

E-Mail: info@ouyukai.net

「新たな伝統を築く」

学校長 星 野 喜代美

鷗友会120周年おめでとうございます。
伝統とはすごいものです。

早いもので中高一貫教育校として今年で7年、この春には1期生の頑張りで白鷗旋風が吹き、白鷗の名も全国に少しは知れ渡るようになり、少し肩の荷が軽くなりホッとしています。1期生の結果を受け、2期生・3期生も目の色が変わり、勉強への取り組みが以前にも増してきました。朝7時からの数学講習には2・3期生ともに50名ほどの生徒が取り組んでいます。2期生は最後の頑張りで成績も上がってきており、1期生に劣らない成果が期待されます。自然にこの様な環境になってきたこと、これが伝統なんだと感じています。

学校見学会は中学・高校ともに激増しており、これから益々楽しみな状況にあります。良いところは伸ばし、必要なところは改善して行くことができるのが今の白鷗です。今年の文化祭では4年ぶりに白鷗御輿が、3年生の手で復活しました。また、邦舞・邦楽の特別枠入学生による公演は、1年生から5年生までの全員参加となり、近隣をはじめ多くの皆様に見て頂くことができました。これらの取り組みはこの先も伝統として受け継がれていくことでしょう。さらに、現在

進行形でマレーシアとオーストラリアとの姉妹校連携が実現しようとしています。マレーシアとは互いに学校代表数名を1週間程度ホームステイさせ、リーダー研修のような形で受け入れ、授業に参加する形を考えています。オーストラリアとは本校の短期留学の継続的受け入れを行なってもらい、本校は先方の海外研修(修学旅行)の短期受け入れを行い、お金を使わなくとも生の国際理解教育が行えるよう整備していく方向で取り組んでいます。今までの都立高校では行なえなかった取り組みを実現させます。これが現在の白鷗の姿です。このような取り組みを通して有為な人材を育て、白鷗の伝統に厚みを増し、皆さんにとっても恥ずかしいくないこれからの白鷗を作り続けていきたいと考えています。応援よろしくお願いたします。

「創立120周年の歩みに添えて」

学校法人鷗友学園

理事長 小 口 幸 成

「鷗友会」創立120周年を心からお祝い申し上げます。当学園は、1935年に「鷗友会」が府立第一高等女学校の創立50周年記念事業(実際には創立47周年の時)として創立された私立学校です。

当時、府立第一の校長市川源三先生は、校長を17年間務められ、全国高等

女学校長協会理事長であり、当時の女子教育の日本のリーダーでした。

先生は、「現代婦人読本」(女学校上級用副読本)に発表された論文がもとで、退官が早まりました。それまで「鷗友会」は創立50周年記念事業として鷗友会館設立のための積立を行っていました。市川先生に自由な立場で理想となさる教育を実践していただき、同時に会員の娘達にも母親が受けた進歩的な教育を受けさせたいと願って、当学園を開設いたしました。詳しくは、「鷗友」第60号(鷗友学園号、昭和10年3月18日発行)に掲載されています。

市川先生は、「全人主義」教育を主張していらつしやいましたので、「良妻賢母」としての女性である前に一人前の人間であれ」、「社会の中で自分の能力を最大限發揮して活躍する女性になれ」と教えられました。当学園は創立以来、市川源三先生、石川志づ先生のご意志を受け継いで、以下の三方針を継続しています。

1、学校(教員)と家庭(保護者)と子女(生徒達)が互いに信頼関係にあつて、和をもって教育の実をあげるという「三位一体」の教育を励行しています。
2、「慈愛と誠実と創造」の校訓のもと、各授業科目の中で具現化を実行しています。

3、創立当時から重視されていた園芸教育・実験教育・体育教育を基盤として、

カリキュラムを編成しています。

2007年9月に市川源三先生の胸像をご寄贈いただきました。市川源三ライブラリーで眼鏡を掛け替えて、生徒たちを静かに見守ってくださっています。

今後とも、妹校ですのでご指導を賜りますよう、よろしくお願いたします。

「鷗友会創立120周年に寄せて」

双鷗会会長 小 林 浩

鷗友会創立120周年、誠におめでとうございます。三年前に白鷗高校の創立120周年の周年行事のお手伝いをさせて頂いた時にも肌で感じた事ですが、改めて白鷗の伝統の重さ、素晴らしさに感激しました。

現在私は五年生(高校二年)の娘を白鷗に通わせております。中高一貫校になつてからの第三期生です。娘本人は中学に入学以来、毎日楽しく学校に通っております。楽しい友達、先輩、後輩、そして先生方にも恵まれ、まさしく青春時代を謳歌しております。

親として白鷗に子供を進学させて本当に良かったと思つた事は校風です。進学校という事も大きなひとつの要因でしたが、「リーダーシップの取れる人材育成」が娘の将来に役に立つと思つたからです。昨今の渾沌とした社会情勢(不況・天災など)の中で、本当に必要なのは

「同窓会充実が学校発展の鍵に」

非常勤 鍋谷博正

改めて「人間性」だと再認識したからです。社会を構成するのは人です。人との繋がります。コミュニケーションを取ることは必須ですが、その中でもリーダーとなり物事を進めていく能力が時代求められていると思います。リーダーになる事で人の心の痛みや感情を理解することが出来る様になり、しいては自身自身の心の成長に大きな影響を与えられる様になると思います。学生時代にその様な環境に身を置ける娘は素晴らしい機会を勝ち取ったと思っています。

それはひとえに白鷗の卒業生の鷗友会の皆様のお陰だと思っています。皆様が築いてこられた伝統を現在の生徒達が継承できる様に学校をサポートしていきたいと思っています。

今後も鷗友会の皆様の御健勝と鷗友会の益々の御発展を心よりお祈り申し上げます。

「鷗友会の皆様へ」

高校副校長 須永修爾

着任してもうすぐ1年が経ちます。伝統校・白鷗高等学校・同附属中学校に赴任を命ぜられた私は、これからも白鷗発展のため、精一杯つとめていく覚悟です。鷗友会の皆様には、今後とも本校教育にご理解、ご協力くださいますようお願い申し上げます。

「歴史と伝統」

附属中学校副校長 松浦明博

着任して8ヶ月が経とうとしています。早8ヶ月と言いたいところですが、実はとても長い8ヶ月でした。

都立中学校の副校長と言う立場は、分からないこと、慣れないことも多く、一日が矢のように過ぎ去る毎日でした。

都立中高一貫校はまったく新しい取り組みであり、白鷗はそのパイオニア、諸先輩の方々もつとご苦労されたのかもしれない。そのような中でも心の琴線にふれるもの、それは白鷗の歴史と伝統を感じる瞬間です。白鷗が、幾星霜に耐えて生き続け、さらに多くの人々に記憶される学校となることを願ってやみません。

鷗友サロン

「鷗友会のお仕事を手伝って」

五十七回 林 きぬ子

昭和二十二年四月、母校に着任した時に恩師の岡田芳子先生から、「卒業生は鷗友会のお仕事をするので、手伝ってね」といういろいろな話をお聞きしました。

戦後の荒廃は凄惨なものでした。総会にお出しするお菓子を、アメ横のお店で買い求め、リュックに背負って家庭科室に戻り、小袋に詰め替えて準備完了。翌日、家庭科室に行くと、お菓子は影も形もありません、泥棒に盗まれてしまったのです。

戦後の混乱期は名簿が作れずに、住所の判明した個人カードを順番に貼りつけました。この作業が大変で、岡田先生と定時制の生徒さん二名とで作業しましたが、長く時間がかかり、夜になってしまいました。その時、定時制のお二人が、家が近いから後は自分たちでしますからと言って下さり、授業が終わった後、続けてくださいました。翌日、総会の席に名簿を展示することができて、皆さんがみてくださり、不明者の住所などをお知らせくださいました。このお二人には深く感謝しております。

く感謝しております。

戦前いらした卒業生は皆さん退職されていまして、新聞を作るのにも、内容については、滝野川の清水三千恵先生のお宅へ、配置については、駒込の水島由美子先生のお宅へ、会計については千駄ヶ谷の山口富貴先生にみて頂くといった調子で、放課後はとても忙しかったです。

戦後、数年の間はこんな具合で何とか会の運営を続けてまいりました。

鷗友会は「会長市川源三」の下、長年、理事と卒業生（教員）とで会を運営し、発展させてきましたが、次の桜井賢三校長に替わられた時、「名誉会長市川源三」「名誉会長桜井賢三」となり、更に「会長大館龍祥」となり、その後、洋作法室に理事や大先輩が集まり検討を重ね、昭和二十七年に規約を改正し、「会長制」ではなく、「理事制」となり、『校長は顧問となり、代表者として理事長を置く』ときまり、「四十五回森智恵子先生」が初代理事長にられました。以来、鷗友会の代表は会長ではなく、理事長となりました。

あれから六十数年も経ちました、鷗友会のさらなる発展を願っております。



「移り変わる時代の中で」

白4回 吉 堀 和 子

(創立60周年の年に卒業)

鷗友会の歴史の丁度真中、私達の学年は入会した様です。振り返って見ると、教育制度の変わり目毎に当り、時代に翻弄されていた事を痛感する次第です。

◎紀元二千六百年(昭和15年)尋常小学校に入学。通信簿の評価は甲・乙・丙。

◎翌年、国民学校と改称。優・良・可の成績表に。12月太平洋戦争勃発。18年から空襲を避け、地方への疎開始まる。19年集団疎開で、上級生の教室は閑散。20年8月やっと終戦。夜、明りがつく。

◎21年4月焼野原の中に残った都立第一高女に入学、ガラスの割れた講堂での入学式。記念写真は制服、標準服、私服と様々。そのまま女学生を続けられると思いきや、翌年から都立第一女子高校併設中学生として二年過ごし、高校では他の都立高校に先駆け、男女共学！校名も「都立白鷗高等学校」と変り卒業時は、9組中男女組は3組。ゴールインしたカップルも何組か・・・

時代の中で常に新しいものに振り廻されていた私共もあと二年足らずで傘寿を迎えます。
穏やかな刻(とき)を願うばかりです。

「拝啓 白鷗高校様」

白14回 浜 田 宏 子

(創立70周年の年に卒業)

貴方に初めてお会いしたのは丁度五十年前のこと、東京に引越してくるにあたって、どこに転校したらよいかと、父が在京の友人に相談したところ、貴方を薦められて昭和三十六年三月試験を受けて、三年生に編入した次第です。

三年生からの新しい高校生活、朝の集まりの際の自鷗体操も心もとなく見よう見まね、何とも心細い思いにとらわれている暇もなく受験勉強の真つただ中、定期試験、実力試験と追われているうちにアツという間に卒業を迎えました。またたくの方向ちがいからの越境入学だったので通学時間も長く、時々欠席して生徒手帳で届ける欠席の理由に「疲労のため」などと書いて、受け持ちの分銅先生から「君は遠いからなー」と労りの言葉を頂いたのも今は懐かしい思い出です。

以前の学校には「二年間在籍しても卒業していないから」白鷗では「卒業生といつても一年間だけだから」と、どちらの学校にも何となく引け目を感じつつ、でもしつかり両方の高校の同期会、クラス会に図々しく顔を出しています。今では私には出身高校が二つあるんだと、ちよつと得した気分でもあります。
あれから五十年、大病を患うこともな

く大過なく今に至る幸運を何かに感謝したい気持ちで一杯です。

ちなみに私の四十余年來の伴侶は以前の高校に二年生で編入してきて同じクラスで過ごした転校生。そして親しい友人の一人もそういえば中学の時の転校生です。私にとつて「転校生」という語は人生の大きなキーワードというわけでしょうか。

「移りゆく時見るごとに心痛く昔の人の思ほゆるかも」この大伴家持の万葉歌が心に沁みる今日この頃です。これからはできるだけ多く懐かしい人、土地を訪ねて旧交を温めたいと思っています。

貴方白鷗高校も中高一貫校という新たな伝統を築くべく華々しくスタートされたご様子、よそながら益々のご発展を心から応援しております。

秋の夜長にことよせて、とりとめもない乱筆乱文どうぞお許しくださいませ。

かしこ

「あつという間に3倍に」

白24回 磯 野 信 吾

(創立80周年の年に卒業)

代表的な劣等生であったと確信している私に、創立120周年記念号の寄稿依頼が届いたことに大変驚いています。

1992年に小学4年生の長男を亡くして以来、記憶を遡ると頭の中が真っ白になることをしばしば経験しています。

で、ごく新しいところで書かせていただきます。

都立白鷗中学の学校医の話が来ました。生徒数120名とこのでしたのでこの人数なら引き受けましたが、1年で2倍2年で3倍になりました。360人です。最初の120名は第1期生なのでした。入学式にも参加しました。ご両親に代わって担任の先生が出席された方も居られたようです。本人の希望と出身校の期待も背負って輝いているけれども緊張して硬くなっている顔を、宝の山を見つけたような気持ちで見えていました。平成22年度はその1期生の大学受験の年でした。結果は見事なもので、大震災の影響で後期試験が中止にならなければ、確実にもっと良かっただろうと校長先生がコメントしていました。

受験の常として浪人の方々もいることでしょう。2浪経験者の私としては、浪人の方々にもエールを送りたいです。後から考えると貴重な経験で人としての厚みが付くような気がします。

中・高一貫校白鷗の卒業生も在校生も自分の目標に向けて全力を出し切ってください。

「鷗友会百二十周年に寄せて」

六年六組 村 田 隆太郎

鷗友会創立百二十周年、誠におめでと

同 期 会

うございます。私達在校生が日々充実した学校生活を送れるのも、諸先輩方の創り上げた本校の伝統のお蔭と感謝申し上げます。

さて、本校に入学してから、様々な思い出を作ることができました。日々小テストや多くの宿題が立ちはだかり、毎日必ず勉強せねばならない環境であったということも思い出の一つですが、私の心に深く刻まれているのは多彩な行事です。

学年全体で交流を図ったHR合宿、皆で清々しい汗をかけた体育祭、学校がより華やいだ文化祭、白鷗史上初の海外修学旅行、クラスで心を一つに合わせた合唱コンクールなど枚挙にいとまがありません。これらの行事を通じ、仲間との絆や団結の素晴らしさ、又、意見が対立した際には時にはぶつかることも大事だということなどを学ぶことができました。

今、私達は大学受験が目前に迫っております。今まで私達を支えてくださった先生方や鷗友会の皆様には感謝の念で一杯です。今後は本校で学んだことを活かし、本校の理念である「開拓精神」を胸に、世界で活躍する有為な人材となるべく努力を続けたいと思っております。

私達も間もなく鷗友会の一員に加えさせていたくことになりますが、今後とも何卒宜しくお願い申し上げます。

「同期会生き残りをかけて」

白8回 稲越 伸 江

平成18年暮れに9回目の同期会を開催してから、3年毎にとの期日もとうに過ぎていくのに誰も声を上げる者もない状態が続いていました。さすがに高島会長からそろそろ検討したいと幹事に召集がかかったのが22年2月、その第1回目の集まりに連絡が悪くて3名しか来なかったというのに愕然とし、危機感を持ちました。仕切り直しの幹事会で皆がだんだん負担になっていることから同期会取止め案も出る中、大川さんから「同窓会トータルサポート」なるものがあるという話がありました。息子さんがそこを使ってなかなか良かったとの事で、諸々の不安はあるものの、一度話を聞いてみようということになりました。3月の幹事会に来ていただき、お人柄も拝見し、説明も伺って今回試しにお願いしてみようということになりました。こちらの希望条件を細かくお伝えし条件に合った会場をいくつか提案いただき幹事が下見に行つて決定しました。会費についてもいつもどおりのこちらで決めた額で賄ってくれるとのことでした。幹事として一番大変な名簿作り、案内状発送、出

欠確認、会費徴収等は全てお任せでした。同窓会予告発送と同時にホームページも開設され、住所不明の方が20名近く判明したのはさすがでした。

さてその日は

平成22年11月27日(土)会場は八重洲富士屋ホテル、交通の便がよかつたためか、遠く北海道から駆けつけて下さった方もあり、

恩師五名(岡本武男、木村正三、林きぬ子、星野賢造、本間惣太郎の諸先生)をお迎えし、総勢104名の大変楽しい会となりました。

受付、進行、写真等もトータルサポートさんで気を配ってくれましたので幹事も始めから会に参加できた気がしました。

しかしいいことばかりではありません。年が明けてからの反省会ではお料理があまり美味しくなかったという声が聞かれ



ました。会費の中からトータルサポートさんの経費を捻出する訳でそのぶんお料理にシワ寄せがいったのではないかな……これは次回目標の「喜寿の会」での検討課題となりました。

年々年を取り同期会の準備も大変で、もう最後になりましたよということにした学年もあると聞いたことがあります。こんなサポートを利用して続けることも可能です。そんな方々の参考になればと思います。我々の試みを紹介させていただきました。

「制服画の修復と校庭写真の額装」

白31回 石 井 さかえ

鷗友会室にある制服画をご存知でしょうか？ 全部で8枚、うち6枚は故橋本興家先生が描かれたものです。先生は東京美術学校師範科(現東京芸大)卒業後、大正14年12月から昭和31年3月まで、府立第一高女及び白鷗高校の美術教諭でした。昭和7年に描かれたこれらの絵は同校女学生の服装を年代を追って描いたものです。ドレス姿や着物、袴そしておなじみのボレロ型制服と続いています。残りの2枚は作者不詳の男子学生と女子学生の絵です。(ホームページで見られます。)長い間の展示で埃を被った状態だったので、120周年の機会に洗浄・修復し

ました。絵も額もきれいになり、実物は
鷗友会室に展示してあります。ご覧にな
りたい方は是非お越しください。なお、
興家先生は多色木版画家として活躍さ
れ、版画作品「夏景名城」が高校4階ホ
ール入口に展示されています。

絵の次は写真です。写真家で白鷗6回
卒業の故藤井秀樹氏が、昭和61年、旧
校舎の取り壊し前に写した素敵な写真で
す。旧校舎を背景に、校庭でバレーボー
ルなどに興じる生徒たちが生き生きと写
しだされています。去年の白鷗祭で展示
したところ好評を得ましたが、横長の写
真のため保存が難しく、それではと今年
額装しました。旧校舎の360度校庭写真、
こちらも鷗友会室に展示してありますの
で、ぜひご覧ください。もしかしたら貴
方が写っているかもしれませんよ！

「白鷗祭に参加」

白58回 野崎 絵美

さる9月17・18日の両日、白鷗高校・
附属中学校で白鷗祭が開催されました。
若い世代に鷗友会の活動について知って
もらう機会になればと、昨年に引き続き
鷗友会も参加し、両日で約500名の訪問を
受けました。

120年の歴史と伝統を伝えるため、第一
高女時代の卒業アルバムや文集、教科
書、旧制服などを展示しました。古い教

科書は在校生にとっても評判で、「こんな
ことを勉強していたのか」「難しい！」
「あ、これは解ける！」と友人同士で楽
しそうに読み交わしている姿が多く見ら
れました。ま

た、展示して
いた旧制服を
試着したいと
いう希望が相
次ぎ、在校生
はもちろん、
卒業生や入学
志望の小中学生が試着し「ボレロがかわ
いい！」と大喜びでした。



大震災の影響で校内の空調が大幅に制
限されるなか、鷗友会は来場者に少して
もリフレッシュしていただければと、冷
たいお茶や菓子を用意し、座席数を増や
しておもてなしました。在校生や
保護者の方々、現・旧職員の先生方、卒
業生、入学志望の小中学生とご家族
など、幅広い世代の方に多数ご来場いた
だき、人いきで部屋の中が蒸し暑くな
ってしまう場面もありました。旧校舎校
長室で使用していた机と椅子は今年も評
判で、その座り心地の良さに思わずうと
うとしてしまうお子様もいたようです。

部屋の入り口で来場者の注目を集めた
旧校舎の模型は、制作者である白鷗38回
の田中(岳)さん・長峰(弘)さん・熊倉さ
んが今年もメンテナンスに来てくださ

ました。その傍の
壁には、第一高女
および白鷗高校を
卒業された著名な
先輩方をご紹介す
るポスターを貼り
ました。急ごしら
えではありましたが、来場者が120年の歴史を実感する良い
きっかけになったようです。



今年は鷗友会120周年記念事業の一環と
して、昨年も展示しご好評をいただいた
旧校舎360度写真パネルのための額を購入
しました。昨年5月に逝去なされた白鷗
6回卒業の写真家、藤井秀樹さんより寄
贈された貴重な写真を、少しでも長く保
存し後世に伝えることができればと願っ
ております。ご遺族の方より寄贈された
藤井さんの作品も合わせて展示し、来場
者の注目を集めておりました。

旧校舎の写真パネルと同様、120周年記
念事業の一環として修復に出した女子
旧制服の絵画は、残念ながら白鷗祭に間
に合わせることでできませんでした。現
在、白鷗高校で美術を担当されている瀧
島先生が中高一貫校の新しい制服の絵を
鋭意作成中でいらつしゃいますので、来
年の白鷗祭では新旧制服の絵画を合わせ
てご覧いただければと考えております。
鷗友会の皆さまには、ぜひ来年もご来訪
をお願い致します。

記念講演会

鷗友会120周年記念事業の一つとして、

さる6月25日に記念講演会を開催致しま
した。120周年を機に若い世代へ鷗友会に
ついて広めようと
いう主旨から、鷗
友会の皆さまはも
ちろん、在校生や
そのご家族、近隣
にお住まいの方々
にも宣伝し、会場
となった白鷗高校
4階多目的ホール
には総勢230名のご
来訪をいただきました。



講演者は、鷗友会でもファンの多い
NHKエグゼクティブアナウンサーの
梅津正樹さん(白19回)。「ことばとコミ
ュニケーション」と題して、時代ととも
に変化する言葉についてご講演いただき
ました。

梅津さんは東日本大震災後、受け持つ
ておられる大学の講義にて、「コミュニケ
ーション」について学生とともに改めて
考え、うまく話すことがコミュニケーション
ではなく「相手のことをどう考える

か？ 相手の存在をどう認めるか？」と

いうことが大切であることを実感された

そうです。お仕事

柄、若い世代の言

葉が乱れていると

嘆く意見をよく耳

にされるそうです

が、そもそも日本

語に正しい言葉は

存在せず時間の流

れと共に変化する

ものであり、最近

の言葉があまりに

も急激に変化し

ているだけこのこ

と。その例として

出されたのは「早急」「逆手」「水面」の読

み方ですが、皆さんはどのように読まれ

ますか？ 実は「早急」の読み方は、明治

初期までは「さつきゅう」、明治40年頃

から「そうきゅう」と読まれ始め戦後は

こちらがメインになり、実際に昭和30年

代の国語辞典では「そうきゅう」は誤りで

ある」とされていたのが版を重ねた後は

「そうきゅうとも言う」に変わったそう

です。また、「穴を掘る」「湯を沸かす」

「飯を炊く」といった言葉を改めて見る

と違和感がありませんか？ 正しくは

「地面を掘る」「水を沸かす」「米を炊く」

となるはずですが、耳で聞いている時には

は気に留めない方も多いのではないでし



ようか。梅津さんに改めて指摘される度

に、会場では驚き

や納得の声が聞か

れました。

緩やかな時間を

経て変化した言葉

は受け入れられる

にも関わらず、急

激な変化による

新しい言葉はなか

なか世代の壁を越

えられないもので

す。けれど、自分

の使う言葉は自分

の属する社会の専

門用語であると認

識し、異なる社会

に出たときにはわ

かってもらう言葉

を使用すること。

常に相手のことを

考え話そうと努

力することを大切

にしていましょ

う、という「こと

ばおじさん」から

のアドバイスに、

会場からは大きな

拍手が沸き起こり

ました。



白58回 野崎 絵 美

120周年記念総会

10月30日、日本橋ロイヤルパークホテル3階のロイヤルホールにおいて、鷗友会創立120周年記念総会が開催されました。当日はあいにくの曇り空でしたが、来賓の先生方をはじめ、府一女57回生の大先輩から白63回生の若手まで、総勢200名以上の方々にご参加いただきました。



総会は定刻通り松浦菊枝副理事長による開会の辞で開幕いたしました。まず

初めに、本間皓司理事長

より「120年という長い歴

史は、先生方や生徒たち

が時代の変化に対応して

きた努力の積み重ねの結果である。」とご

挨拶。続いて鷗友会顧問の星野喜代美校

長より「中高一貫の1期生の頑張りが、

2期生、3期生へと伝わ

っている。諸先輩方のコ

ツコツやる白鷗の精神は

脈々と受け継がれてい

る。」とご挨拶をいただきました。来賓の

方からは鷗友学園の小口幸成理事長、

双鷗会の小林浩会長、後援会の寺島総理

事長からそれぞれご祝辞をいただきました。

続いて土屋雅司副理事長が議長とな

り、平成22年度の事業報告、決算報告、

平成23年度の事業計画、予算並びに新体

制となった理事会の紹介があり、拍手を

もって了承され、議事は滞りなく終了い

たしました。

議事終了後はお楽しみ会の催しです。



今年は江戸太神楽曲芸師・翁家勝丸さんの曲芸です。花籠鞠や傘など、曲芸界若手ホープの鮮やかな芸で、お祝いに華を添えていただきました。

大いに楽しませていただいた後は、小川嘉一郎先生の御発声で乾杯、懇親会となり、旧友や恩師達と、時を忘れて楽しく語り合いました。途中、恒例のテーブル毎の写真撮影では皆さま学生時代に戻ったようにはしゃいでおられました。



盛り上がった所で、こちらも恒例の新旧校歌を小栗茂子さん(白3)の指揮で斉唱。大変和やかな中、名残を惜しみながら閉幕となりました。

尚、懇親会終了後に、双鷗会が作成した「オリジナル日本手ぬぐい」の販売がありました。宮城県気仙沼高校への震災支援として、収益金をお届けするという趣旨に多くの方が賛同くださりお買い上げいただきました。ご支援いただきましたして、心から感謝いたします。

白55回 柳沢泰隆

鷗友会120周年記念年表

〔111周年(H14)〕120周年(H23)〕

(☆鷗友会 ●母校)

H14 新会員283名(白54回)

白鷗祭テーマ『最彩祭』

4月20日 評議員会

7月7日 総会《銀座高松本店》

☆会報「鷗友」が小冊子から新聞形式に変更され、発行は年2回(春・秋)に。(136号、137号)

☆奨学金増額のため寄付募集開始。

☆奨学生基金始まる！

奨学金授与 7名(内、基金より2名)

H15 新会員277名(白55回)

白鷗祭テーマ『歌芸乱舞』

4月19日 評議員会

6月22日 総会《白鷗高校・多目的ホール》

演奏：長唄三味線部・和太鼓部

☆奨学金授与 7名(内、基金より1名)

☆「鷗友138号、139号」発行

●田中晋一郎校長 ご退職

●今成 昭校長 ご着任

H16 新会員268名(白56回)

白鷗祭テーマ『turning point～少年時代～』

4月24日 評議員会

6月20日 総会《ロイヤルパークホテル》

講演：志賀こず江さん(白19回)

☆奨学金授与 7名(内、基金より3名)

☆「鷗友140号、141号」発行

●新制服決定

H17 新会員279名(白57回)

白鷗祭テーマ『絢爛鷗歌祭』

4月24日 評議員会

7月10日 総会《東京會館ロイヤルルーム》

講演：梅津正樹さん(白19回)

☆奨学金授与 10名

☆「鷗友142号、143号」発行

●東京都初の中高一貫6年生学校に

●都立白鷗高等学校附属中学校開校記念式典

〔10月17日：トリフォニーホール〕

H18 新会員281名(白58回)

白鷗祭テーマ『勇鷗邁進』

4月22日 評議員会

7月9日 総会《上野精養軒》

☆奨学金授与 10名

☆「鷗友144号、145号」発行

●今成 昭校長 ご退職

●佐々木正文校長 ご着任

●和太鼓部「全国高校総合文化祭・郷土芸能部門」

全国3位

H19 新会員269名(白59回)

白鷗祭テーマ『鷗金伝説』

4月21日 評議員会

7月8日 総会《浅草ビューホテル》

講演：佐橋紀男さん(白11回)

☆市川源三先生の胸像を鷗友学園に寄贈

☆奨学金授与 10名

☆「鷗友146号、147号」発行

H20 新会員212名(白60回)

白鷗祭テーマ『青春鷗歌』

4月26日 評議員会(本年度総会に代える)

10月5日 母校創立120周年記念お祝い会

《パレスホテル》演奏：長唄三味線部

☆奨学金授与 8名

☆皆勤賞始まる 14名

☆「鷗友148号、149号」発行

●母校創立120周年記念式典

〔11月15日：東京文化会館〕

H21 新会員222名(白61回)

白鷗祭テーマ『これは祭りじゃない、任務(ミッション)だ。』

4月25日 評議員会

7月5日 総会《ホテルパークサイド》

講演：梅津正樹さん(白19回)

☆鷗友会規約改正

☆奨学金授与 15名

☆皆勤賞 30名

☆「鷗友150号、151号」発行

●佐々木正文校長 ご退職

●星野喜代美校長 ご着任

●講演会：滝本沙奈さん(白55回)

〔3月18日：白鷗高校 多目的ホール〕

H22 新会員229名(白62回)

白鷗祭テーマ『遊☆戯☆鷗』

4月24日 評議員会

6月27日 総会《如水会館》

余興(落語)：桂才紫(田中秀樹さん)(白45回)

☆「白鷗祭」へ参加

☆新H.P.開設

☆奨学金授与 10名

☆皆勤賞 19名

☆「鷗友152号、153号」発行

H23 新会員229名(白63回)

白鷗祭テーマ『鷗！yeah!』

4月23日 評議員会

10月30日 鷗友会創立120周年記念総会

《ロイヤルパークホテル》

余興(太神楽)：翁家勝丸さん

☆鷗友会創立120周年

☆「白鷗祭」へ参加

☆創立120周年記念講演会：梅津正樹さん

〔6月25日：白鷗高校 多目的ホール〕

☆奨学金授与 10名

☆皆勤賞 24名

☆「鷗友154号、155号」発行

(白37回 吉田啓子記)

★古きをたずねて新発見★

鷗友会設立120周年という節目を迎え、改めて母校の歴史の重みを感じているこの頃です。さて、当欄では、120年前の白鷗高校界限はどのようなものであったかを当時の時代背景などを紐解きながら遡ってみたいと思います。ご一緒にしばしの時空旅行(?)にお付き合い頂けましたら幸いです。

浅草区七軒町への移転

本校は、1889年(明治22年)東京府高等女学校として現在の中央区築地に発足し、1896年(明治29年)千代田区神田錦町への移転を経て、1901年(明治34年)東京府立第一高等女学校と改称されると同時に浅草区七軒町の出羽松峰(松山)酒井家の藩邸の跡地に新校舎が建設されることが決定。翌1902年から工事期間一年余り



本校の顔を忍川が流れていた様子(明治45年頃)です。

をかけ1903年(明治36年)8月に落成しました。浅草七軒町の区域は、昭和39年10月までその名を使用しており、本校一角が町域の大半を占めていたようです。明治28年に春日通りが開通され、奥から厩橋、手前に御徒町、湯島切通し方面と繋がっていました。不忍池から流れ出た水は忍川と呼ばれる細流となり、複雑に屋敷地を蛇行し、本校前を経て三味線堀に落ちたと言われています。

ちなみに、酒井藩は出羽飽海郡松山(山形県酒田市)の譜代大名でしたが、戊辰戦争で敗れ明治元年2500石を減封、翌2年に藩名を松嶺と改称されました。「七軒町」とは、酒井邸の華藏院門前に七軒民家があったことにちなむと言われています。

「御徒町」の由来

では、当時も今も変わらず使われている「御徒町」の名前の由来をたどってみましょう。御徒町は、江戸時代、江戸城や将軍の護衛を行う下級武士、つまり騎乗が許可されない武士「御徒衆(徒士かち)」が多く居住していた町でした。徒士は、士分格を持たない足軽とは峻別され、戦場においては主君の前駆をなし、平時は徒歩組として城内の護衛や中間管理職的な行政職(徒士目付、勘定奉行の配下など)に従事していたそうです。御徒町周辺の長屋に住み、緑(給与)だけでは家計に余裕がなかった彼らは、内職をしながら生活していたといわれています。江戸時代「乗り物」といえば駕籠か馬が主流で、徒歩衆はもちろんのこと一般庶民たちは「歩く」以外に移動手段はありませんでした。その後、時代の変遷

により技術の開発とともに人力車から自転車、オートバイ、自家用車、バス、電車そして飛行機と、「乗り物」産業は劇的な変化を遂げました。一人の人間を「駕籠」のようなもので二人あるいは数人で運んでいた時代から、一人の運転手が、一度に数多くの乗客をより遠方まで、飛行機ならば海外へまでも運ぶ時代になったのですから便利になったものなのです。

明治の高層ビル「凌雲閣」

120年前といえば、1890年(明治23年)11月、浅草周辺には凌雲閣(通称 十二階)が浅草千束町に建造されました。名称は、「雲を凌ぐほど高い」ことを意味し、写真家東京市議会議員でもあった江崎礼二によつて発案され、東京における高層建築物の先駆けとして建築されました。設計者はW・K・バルトンというイギリス人で、赤レンガ八角形をしており、高さ約67メートル、閣内はツルベ式昇降装置(エレベーター)で1分間に8階まで達する仕組み(危険であったため半年で撤去された)は当時の人々を驚かせたそうです。



現在、墨田区にそびえ立つ東京スカイツリーは六三四メートル(地下階を入れますと六六六メートル)といえますから、文明の発達はめざましいものです。

このように日本社会を振り返ってみます

と、現代は「高速で高層な」ものに囲まれた非常に便利な世の中であることが感じられます。この世のすべては諸行無常であり、万物は移り変わりゆくものと心得てはいるものの、便利さが先立って古き良きものを味わう感覚が失われてゆくことに寂しさをおぼえてしまうときもあります。なぜなら、人々の心の奥に鮮やかな記憶として深く残るものは、たとえば季節ごとの風の香りや人と人との触れ合いなのではないか、と思われるからです。そして、そのような貴重な体験は、自らの足でしっかりと歩いてこそ得られるものでしょう。いつの時代も、常に新しいものを求め開拓してゆく精神は本校教育の理念でもあります。古き伝統を学びつつ、変わらぬものと変わりゆくものそれぞれに想いを馳せながら、御徒組のように「徒歩」にて母校周辺をぶらりぶらりとご散策されてみてはいかがでしょうか。何か新しい発見があるかもしれません！

白55回 駒崎 恵

参 照

<文 献>

濱本 高明著「浅草風俗二十帖」1997年 演劇出版社

<ウェブサイト>

「下町のいま、むかし」

<http://www.maroon.dti.ne.jp/~satton/taitou-imamukasi/sitikentyou.html>

七軒町の由来

<http://www.geocities.jp/ktyyn37/odaiba.htm>

江戸大名公卿 <http://www1.parkcity.ne.jp/site/79.html>

<ウィキペディア>

「御徒町」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BE%A1%E5%BE%92>

「凌雲閣」<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%87%8C%E9%9B%B2%E9%96%A3>

支部だより

関西支部

「鷗友会・関西支部秋の集い」は、平成22年11月11日、グランヴィア大阪「桜の間」で開かれました。出席者は15名。

はじめに、3月7日に亡くなられた浜田千恵子さん(47回)に黙祷を捧げました。尚、生前関西支部の集いをいつも楽しみにされていたとことで、ご子息から金一封のご寄付をいただきました。その後、西海和子さん(60回)の乾杯で会は始まり、タイムスリップしながら話しも弾み、和気あいあいと和やかに楽しく、午後のひと時を過ごしました。



昨年は数年ぶりにご出席された岡本歌子会長(50回)は、リハビリ中で今回ご欠席されたのは残念でしたが、田代和子さん(56回)、安丸敏子さん(白10回)、大西常子さん

(白12回)のお久しぶりのご出席、又、大貫誠さん(白11回)の初のご出席などうれしいことでした。

来年秋には又元気で再会をと約し、名残りを惜しみつつ散会しましたが、皆様のご出席がしやすいように、次回も同じ会場で11月10日に開くことにいたしましたので、より多くの皆様、特に男性会員の積極的なご参加を大いに期待しております。

白14回 樫根 みづえ

東葛支部

平成23年9月4日(日)、三井ガーデンホテル柏にて、鷗友会員の集いを開催しました。過ぎ去ったとはいえ台風の風がまだ強いなか、15名の参加をみました。恒例の景品つきクイズ。今年は「味覚の秋」で、別々の皿に載っている、同じ種類の果物を食べて、どちらが千足屋の物かと当てるのが4問。国産の松茸の可否を嗅ぎ分けるのが1問、計5問を出題しました。



最高得点者は4問正解で、

会費納入について

「ペアで1泊2食付、温泉宿泊券」が2名に渡りました。来年はあなたも当地区の鷗友会に参加して温泉に行きましよう。参考までに、普通のスーパード買ったほうのピオーネ(ぶどう)を、千足屋のだと答えてしまった人が9名、同じく辛水(梨)にいたっては11名でした。

白17回 中野 愛彦

第34回川崎支部 同窓会のお知らせ

日時 平成24年5月12日(土)

12時～14時(受付 11時30分)

※前号でお知らせした日時が変更になっておりますのでご注意ください

場所 銀座 交詢社

(交詢社は福沢諭吉の主唱により明治13年に作られた日本最古の社交機関です)

会費 8,000円

地域を問わず鷗友会の方のご参加を歓迎いたします。

ご連絡頂きましたら、平成24年2月に同窓会案内状をお送りいたします。

「卒業何年生、名前、住所、電話番号をメール又はFAXでお願いします」

幹事 鈴木清弘 井出美智子 横山節子

卒業50年を経た会員は会費が免除されます。今年は昭和36年卒業の白鷗13回以前の方々が該当しますので、白鷗14回～白鷗53回の会員のうち会費未納者へのみ振替用紙を同封しました。

◇年度会費なら 千八百円

◇前納会費(十年分)なら壱万五千元のどちらかを、同封振替用紙(振込手数料は会負担)で郵便局又はコンビニからお振込み願います。

☆郵便振替(会費)の口座番号は

00180-7-3052

◆コンビニからも振込が出来るようになりますのでよろしく願います。

鷗友会への種々振込簡便化で、コンビニエンスストアを利用できるようにしてみました。もちろん、今迄通り郵便局もご利用いただけます。ただ、コンビニ利用の場合、額面通りの金額のみしか利用できません。額面以外の金額で利用される場合は、金額欄を訂正して、郵便局からの利用になります。

創立120周年ということもあり、奨学金基金への寄付用紙を用意しました。奨学金として毎年120万円ほどを支出しています。後輩のびやかな学校生活を応援してゆくためにも、皆様の温かいご支援・ご協力をお願いしたいと存じます。

◇庶務日誌◇

5月21日 理事会 記念講演会など
25日 鷗友154号発行
記念講演会ポスター・チラシを町会・校内に掲示・配布
6月18日 理事会 360度校庭写真の額装・制服油絵の修復を検討。
25日 鷗友会創立120周年記念講演会 230人強の聴衆集まる。
28日 平成23年度第1回鷗友奨学金授与10名
7月9日 理事会 記念総会、会費・奨学金のCVS利用検討・決定。白鷗祭参加決定。
12日 府一女54回池田早梅さんドキュメンタリー作品の取材と撮影。
7月15日 360度校庭写真額装発注。
29日 制服絵画修復発注。現在の制服の絵は瀧島教諭に制作依頼。
8月2日 白6回故藤井秀樹氏夫人(白6回 禧子さん)・子息 立秀氏来校。

逝去された方々

左記の方々の御冥福を
謹んでお祈り申し上げます。

元校長 土肥 輝雄 23・9・4
旧教員 望月 ヒロ 22・12・19
旧教員 京極 興一 21・6・
旧教員 佐藤 晃 23・1・9
旧教員 奥谷 茂 23・10・14
33 伊藤 八重 S 34・
44 日向 初子 23・
44 茶谷 千代 23・6・
45 中野 ツヤ 22・9・16
45 永井 きみ 22・1・24
47 鈴木 喜久 23・2・21
47 榊村 栄子 23・5・23
48 佐久間 静子 23・8・2
48 榊 三枝 22・6・19
48 相楽 三重子 22・9・2
48 富永 恵美子 23・1・11

49 大隈 家栄 22・9・12
49 後藤 美智子 21・12・14
49 林 富士子 17・4・21
49 原 貞 22・11・8
50 扇田 臣子 23・3・
50 丹波 敏子 23・7・12
50 杉谷 純子 23・6・3
50 小土 芳子 21・10・
52 有川 悦子 S 23・5・21
53 石川 富美子 S 18・
53 大川 洋子 S 49・1・16
53 倉若 陽子 22・13・15
53 中野 章代 22・6・10
53 長谷川 きよ 23・5・30
53 秋元 文子 S 57・10・
53 佐々木 八千代子 21・1・
53 佐野 咲子 S 38・5・28
53 藤田 律子 S 2・12・16
53 古澤 圭子 S 61・5・28
53 横山 節子 S 10・8・26
53 岡本 富士枝 23・10・26

53 大野 照子 23・9・17
53 田口 利子 23・5・15
54 遠藤 良子 23・5・12
54 前田 淑子 23・7・8
54 山北 満寿子 23・6・13
56 鈴木 きみ子 21・5・15
56 近藤 綾子 23・1・17
56 山口 久子 23・5・16
56 宮田 万子 23・7・26
57 郷田 好子 23・7・13
57 丸山 敏子 23・8・
57 古田 泰子 23・5・17
58 篠 一子 23・4・4
58 雨宮 育子 23・9・24
59 井田 孝子 23・4・25
59 金田 明子 23・5・27
59 河田 枝子 23・9・8
59 加納 倅子 23・11・29
59 中里 初恵 23・4・4
60 波木 彌生 22・11・1
60 小出 禮子 23・1・2
63 近藤 麗子 23・6・20
63 須田 濱子 23・10・20

63 篠原 照子 23・12・18
63 喜多村 立子 23・1・1
63 山田 瑠子 23・12・15
64 飯島 政子 22・5・22
3 吉兼 明美 23・7・16
3 趙 乙林 23・12・12
3 村田 幸子 23・5・21
5 鈴木 智江子 23・6・5
5 櫻井 徳忠 23・2・5
6 澤田 明 23・2・7
6 安達 正太郎 23・3・5
9 茅野 陽一 21・12・1
10 清水 昭夫 23・8・2
15 戸塚 睦夫 23・6・2
16 堀江 睦夫 23・9・2
17 中川 睦夫 23・2・2
20 松本 初子 22・12・9
21 村松 博 22・7・22
24 山本 順子 23・4・10
24 川井 順子 23・2・25
29 山本 順子 23・2・10
29 鎌田 敦子 23・3・11
38 市川 統一 22・11・5
60 東瀬 寿美子 23・3・2
61 熊谷 蓉子 23・6・2

高校に秀樹氏の花の写真を寄贈。
鷗友会には写真集などを寄贈。

9月6日 鷗友会事務局夏休み
6日 360度写真額装納品。
10日 理事会 白鷗祭など
17・18日 白鷗祭参加。両日で500人ほど来場

10月15日 理事会 記念総会など
25日 第2回奨学金授与。制服絵画納品。
30日 平成23年度鷗友会創立120周年記念総会
215人参加

11月19日 理事会 総会まとめ 他
22日 総会写真送付
26日 中野ツヤ 前鷗友学園理事長を偲ぶ会
本間理事長 出席

12月3日 理事会

◆物品寄贈◆ (敬称略)

府一女28回 故宮井芳子ご遺族から
夏休み絵日記

白9回 青木秀久より
男子帽章 制服ポタン・袖ポタン

白25回 荒井 進より 男子襟章
府一女45回 故三島將代ご遺族より
卒業アルバム

白2回 故潮田妙子ご遺族より 卒業アルバム

◆寄贈図書◆ (敬称略)

旧教員 石井良治より
「文学に読む自然―文学に表現された地学現象―」

白14回 久保敏子より
「海棠の花はうす紅(くれな)い―俳句を愛した母の思い出―」

山梨県立科学館から
「戦場に輝くベガ―約束の星を見上げて―」

白6回 藤井禧子より
「戦場に輝くベガ―約束の星を見上げて―」

藤井秀樹写真集「救いと微笑み」
「Maquillage Du Corps 水の精」

府一女57回 林きぬ子より
「日本語と日本文化」 「雲」 他

◆奨学金寄付◆ (敬称略)

元校長 小川嘉一郎 一〇〇〇円

元校長 岡部 幸枝 一〇〇〇円

元校長 今成 昭 一〇〇〇円

前校長 佐々木正文 一〇〇〇円

校長 星野喜代美 一〇〇〇円

非常勤 鍋谷 博正 一〇〇〇円

旧教員 宮澤 嘉夫 一〇〇〇円

旧教員 櫛部 浄義 一〇〇〇円

57回 匿名 一〇〇〇円

都一女59回 同期会 一八〇〇円

都一女63回 故喜多村立子ご遺族 一〇〇〇円

白3回 山本三恵子 一〇〇〇円

白3回 進藤 和子 一〇〇〇円

白6回 鎗流馬登久子 一〇〇〇円

白11回 鈴木 清弘 一〇〇〇円

白40回 川口 一枝 一〇〇〇円

古性 晃 一〇〇〇円

◆編集後記◆

創立120周年記念号をお届けします。例年の通常号よりは大幅遅れての師走のお届けとなりましたが、記念号として増ページしたとご了承ください。

親しまれる開かれた同窓会として、更なる飛躍を目指し、理事や監事一同智恵を絞って頑張っております。今回から、配布の方法を郵便局による宅配便に変え、包みも一覧性の高い透明の包装にし、又、会費の振込みも、コンビニエンスストアで簡易にお買物のついでにしていただけ様様に工夫しました。

紙面も、100才を超えた方から卒業直後の18才前後の方まで幅広い年代の方全てにご満足いただける事は至難の技とは思いますが、皆様が会報に何を期待しているかを考えながら編集担当一同、一所懸命頑張っております。

今号はいかがでしたでしょうか？是非皆様のご意見・ご希望を活かした紙面にすべく、読後感等をお寄せいただければ幸いです。

(編集 白17回 土屋 雅 司)